



かもめ風だより

2016.8

VOL8



メニュー紹介

扉の写真…「昭和57年4月18日開催 第2回町長杯争奪弓道大会」

この人・この作品…アンソロジー『おいしい文藝』

『ずるずるラーメン』『ぐつぐつ、お鍋』

『つやつや、ごはん』『ぷくぷく、お肉』

音の缶詰・CDレビュー…魅力的な女性ミュージシャン列伝

ニコレット・ラーソン「愛しのニコレット」

カーラ・ボノフ「ささやく夜」「プレミアム・ベスト」

いちおしコミック…『ぴっぴら帳』『こっこさん』

■扉の写真

写真は、昭和57年4月18日開催の「第2回町長杯争奪弓道大会」です。「広報ところ」同年5月号では、紋別市や留辺蘂町など近隣から60人が参加し、常呂Aチームが2位と伝えています。会場の弓道場は、昭和53年8月12日に完成したもので、スポーツセンター裏にあった旧常呂中校舎の一部と旧武道館の間がありました。その前は、昭和45年10月15日に完成した常呂高校の弓道場を利用していました。今は見られない光景です。



こ	の	人	
こ	の	作	品

アンソロジー「おいしい文藝」シリーズ

『するする、ラーメン』『ぐつぐつ、お鍋』
『つやつや、ごはん』『ぷくぷく、お肉』



●ある特定のテーマで集められたアンソロジーは、おまけいっぱいのお菓子のよう楽しく読めます。好きな作家や興味の湧くところだけつまみ食いするように読める気軽さが一番。今回紹介するのは、「おいしい文藝」シリーズで、『するする、ラーメン』『ぐつぐつ、お鍋』『つやつや、ごはん』『ぷくぷく、お肉』の4冊。出版社は河出書房新社、2014年2月から刊行が始まり、現在はこの4冊以降、『ばっちり、朝ごはん』『ひんやりと、甘味』『ずっしり、あんこ』『こんがり、パン』まで続いています。常呂図書館にはすべて揃っていますが、今回はこれら4冊まで。●まずはタイトルの良さが光ります。脳を刺激する〈するする〉などの擬態語とその後打たれる読点が決まり、そしてテーマとなる言葉がぴったり収まる、読む意欲に駆られるうまい仕掛けです。●アンソロジーは、テーマとテーマをより一層際立たせる「文を集める編集力」がモノをいいます。このアンソロジーの編者は、杉田淳子と武藤正人の2人。1冊に30～40人の短いエッセイが収められていますが、どこから探してきたのかと思うほどに、古今東西・多種多様な文が集められ、好エッセイ群を楽しめます。●1冊目は『するする、ラーメン』。変わり種としては、池部良の「そば大会」と藤子・F・不二夫&藤子不二夫Aの「あこがれのラーメン」。映画俳優の池部良はエッセイでも定評があり、このエッセイでは昭和29年に小津安二郎監督に呼ばれて映画出演した際、小津監督が昼食に「そば（ラーメン）大会」を考え、その手伝いをした思い出を書いています。映画界の細かなエピソードの描写、ふしぎな落ちに味があります。藤子不二夫は、ラーメン好きの小池さんが登場するマンガ、お湯をどんぶりに入れて3分というインスタントラーメン黎明期を彷彿させる名作。●『ぐつぐつ、お鍋』からは、〈小鍋〉をテーマにした池波正太郎の「小鍋だて」と東海林さだおの「小鍋立て論」。食に関するエッセイが多い2人ですが、文章のスタイルと文の運びは違えど、どちらも1人鍋の小鍋はシンプルな具材が一番という結論におもしろい。「どじょう」をテーマにした荻昌弘の「どぜう文化」と沢村貞子の「柳川鍋」も対比が楽しいエッセイです。荻昌弘はどじょうの食文化、沢村貞子は家庭の味としての柳川鍋、どちらもきりりと引き締まった作品。●「つやつや、ごはん」の圧巻は、山下清の「藤代から土浦まで」。旅の途中で、おにぎりを恵んでもらうためにひたすら嘘をつき、寝るところを探す、それを切れ目のない延々と続く文章が、必死さを表しています。これが、憎めないおかしみに変わってしまう…文章の巧拙ではなく、生きるための「ごはん」が良く表れています。●「ぷくぷく、お肉」からは、古川緑波の「牛鍋からすき焼きへ」。関東の牛鍋から関西のすき焼きへ流行が移っていくさまを自身で体験したなるほどの文。もう一つ、懐かしの園山俊二「ギャートルズ」が豪快。原始人の家族が、狩りで得た動物の生肉を食べるだけの暮らしから、焼いて岩塩や唐辛子で味付けをするとよりおいしく食べられる発見をオーバーアクションで描き、エネルギー満点。●とにかかにも、120以上の食のエッセイを味わえるのは幸せなこと。食欲の落ちる夏にうってつけ！残りの4冊もどうぞ。





魅力的な女性ミュージシャン列伝

ニコレット・ラーソン

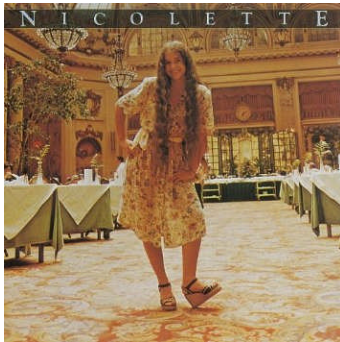
「愛しのニコレット」

カーラ・ボノフ

「ささやく夜」「プレミアム・ベスト」



ニコレット・ラーソンは、デビュー・アルバム「愛しのニコレット」(1978年：26歳)のこの1枚で、人々の記憶に残るアーティストになりました。それだけ印象の強い作品です。このアルバム



には、1970年代後半の有名なミュージシャンたちがバックを努めたり作品を提供し、完璧な1枚に仕上げました。もちろん、彼女の伸びやかで、さまざまな分野の曲を歌いこなす才能があってのことですが、何よりも70年代前半のウェスト・コースト・ミュージックの香りを受け継いだことが大きな要素。

アルバム1曲目の「あふれる愛」は、ニール・ヤングの曲で、このアルバムを代表するヒット作品です。ニール・ヤング・バージョンが少し影のある曲調とすれば、彼女の歌声は、彩り豊かなサウンドに包まれた可憐さと明るさにあふれています。3曲目の「ユー・センド・ミー」は、ソウルシンガー、サム・クックの名曲。美しい旋律を生かし、1950年代の曲を軽やかできらめくような曲に変身させました。6曲目の「ベイビー、ドント・ユー・ドゥ・イット」は、ザ・バンドの曲として有名ですが、ここではリトルフィートとドゥビー・ブラザーズというアメリカン・ロックの代表格のリズムセクションがしっかりサポート。うねるようなタイトなリズムに乗り、力強いロックに仕上げられています。

アルバム最後の「ラスト・オン・ラヴ」は、イーグルスのグレイ・フライとJ.D.サウザーの共作で、しっとりとした情感を込めた美しいバラード。「あふれる愛」で始まったアルバムの最後を飾るにふさわ

しい曲。色あせないアルバムです。

カーラ・ボノフは、残念ながら日本では有名ではありませんが、シンガー・ソングライターとして、数多くの曲を生み出し、リンダ・ロンシュタットやボニー・レイットなど有名どころに曲を提供しています。耳に心地よいすっきりとしたメロディとゆったり心を包むサウンドが特徴。「ささやく夜」は2枚目のアルバムで1979年作。リンダ・ロンシュタットのバックバンドやジェイムス・テイラー、イーグルスのドン・ヘンリーなど豪華な布陣がバックを努め、彼女の曲を引き立てています。しっとりとした中音域のやさしく、時として力強い声が、心にしみみます。



ベスト盤の「プレミアム・ベスト」(1998年)は、彼女が1977年から82年までの間に発表した3枚のアルバムからセレクトした作品集。カーラ・ボノフには大ヒット曲はありませんが、時代に媚びず、普遍性のある曲が多いのが最大の魅力。



今回、紹介した2人に共通するのは、曲の良さはもちろんですが、アレンジやサウンドがとても自然なこと。むだな味つけがない分、35年以上経た今でも輝き、気持ちよく聴くことができます。上質な70年代の良さを2人の歌姫で味わってください。

★『古事記』を身近にたぐりよせる3作品

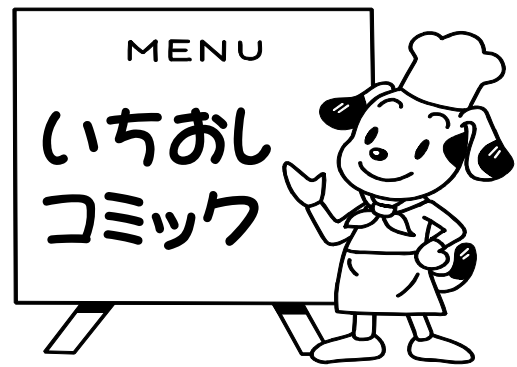
石ノ森章太郎

『マンガ日本の古典 古事記』

(中央公論新社)

近藤ようこ『恋スル古事記』(角川書店)

この史代『ぼおるぺん古事記』1-3 (平凡社)



●何も暑い夏に馴染みがなく、面倒くさそうな『古事記』を紹介しなくても良いのでは…と思いつつ、古事記の世界が身近に感じられる作品が揃ったのでお伝えすることにしました。●最初は、石ノ森章太郎『マンガ日本の古典 古事記』。物語の最初に『古事記』の成り立ちを解説しているのでもまずは引用。『古事記』は、大和朝廷が史書として編さんした最初の典籍。朝廷に伝わる『帝記』(天皇の系譜・事蹟を記したもの)、『旧辞』(説話・伝承の記録)に天武天皇がみずから検討を加えて稗田阿礼に誦習させ、それをのちに太安萬侶(おおの・やすまろ)が筆録し、和銅5年(712年)完成しました。『マンガ日本の古典 古事記』は、上・中・下3部作の『古事記』の内、「建国の由来」をテーマとする神代の物語を収めています。石ノ森章太郎は、できるだけ古事記を誰もが読める物語りにするため、絵のうまさを十分生かし、読み手を飽きさせず、絵の雰囲気を変えたりエピソードを加えたりしながら、原作をどう伝えるかに苦心した作品になっています。児童向けの『はじめての古事記』(徳間書店)が120ページあまりでとても読みやすくできているので、これを読んでから石ノ森版古事記を読むと絵と文がすっきり頭に入ります。●近藤ようこ『恋スル古事記』は、裏表紙に書いている〈神々も恋をした〉のとおり、『古事記』上・中・下から恋愛ものを5つ取り上げています。近藤ようこさんは古典を題材にした作品が多く、神話の世界も人間の世界と変わらない情感や憎悪、自己犠牲、禁断にあふれていることを、すき間の多い独特の絵で表現しています。『古事記』が身近になる作品です。●この史代『ぼおるぺん古事記』は、作者のきまじめさと遊び心がセットになった作品。3冊で石ノ森版と同様上巻(神代の物語)を描いていますが、タイトルどおり全編ボールペンで絵を描いています。3巻の最後には使いやすく細工をしたボールペンが27本描かれています。絵の緻密さを見ると、その意志の強さに圧倒されます。また、あとがきに、現代語訳、訓み下し(よみくだし)文、原文と親しんでいくうちに、「漫画になるのを待っている!」と感じ、古文と絵のみで表現しようと決めたことを綴っています。これは画期的な作品、原文が読めなくても最低の知識があれば、作者の卓越した絵とページの構成力、サービス精神たっぷりのお茶目な絵で、神々が人間くささに富む存在であること、奇想天外で愛と無情が同居する物語を楽しめます。おまけとして作品に登場する神々すべてを系譜として付けていますが、遊び心としつつも『古事記』の世界を完璧につかみ、理解して描いていることが分かります。この史代さんは、おとなにとって間違いなく大切な作家の1人。ちなみに、『日の鳥』は、ボールペンで描くことを発見して生まれた作品。